

<資料>

ウクライナ避難民の子どもたちの絵画展の開催及び アクティブラーニングプロジェクトの実施

野田美波子*・高嶋 啓*

Hosting an art exhibition of paintings by children evacuated from Ukraine
and conducting an active learning project

Minako NODA* and Kei TAKASHMA*

抄 録

本プロジェクトでは、観客や学生に国際情勢や平和について考える場を提供することを目的に、ウクライナ避難民の支援を行う、特別認定 NPO 法人日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）が保有するウクライナの子どもたちが避難先で描いた絵画を、2023年12月12日から17日にかけてつくば市民ギャラリーにて展示した。それに合わせてギャラリートーク、絵画分析ワークショップを筑波学院大学（現、日本国際学園大学）のメディアデザインコースの学生を対象としたアクティブラーニングとして実施した。展覧会には5日間で170名の観客が訪れた。

キーワード：ウクライナ避難民、絵画展、アクティブラーニング、対話型鑑賞

1. 目的

世界中で紛争や戦争が絶えず、平和が脅かされ、人道危機が起こっている。しかし我々日本人にとって、海を超えた遠くの国で起こっている出来事に対して実感を伴って感じ、考える機会を持つ事は多くない。本プロジェクトは、学生が主体となってウクライナ人の子どもが避難先で描いた絵画を展示し、絵画分析を行うことによって、学生や展覧会を訪れた人に国際情勢や平和について考えを巡らせる機

会や場をつくることを目的とした。

2. 絵画展の実施

以下に、絵画展の実施内容を記す。

2-1 プロジェクトに参加した学生及び教員

教員2名、学生9名（3、4年生はメディアデザインコースを専攻）、計11名が参加した（表1）。

* 日本国際学園大学 経営情報学部、Japan International University

**表1 本学参加者内訳
(2023年度の学年を表記)**

教員	2名：野田美波子、高嶋啓
4年生	3名：堀越龍太郎、田中啓伸、高橋潤也
3年生	4名：矢治竜乃介、菊地祥真、中山怜、遠井千寿
2年生	なし
1年生	3名：トロプチン・ニキタ、北川美玖、柴田心歩

2-2 期間、場所

展覧会は2023年11月13日～12月17日の準備期間を含めた約1ヶ月間をかけて大学及び筑波市民ギャラリー（図1）にて実施した。



図1 筑波市民ギャラリー

2-3 絵画の選定

2023年11月13日、絵画の選定を行うため、学生とともに長野県松本市に所在するNPO法人日本チェルノブイリ連帯基金（以下JFC）



図2 子どもたちの描いた絵画、約200作品の中から50点を選出した

に出向し、約200作品ある絵画から50作品を選定した（図2）。その際、フライヤーやポスターのデザインを担当する学生にデザインに使用する作品に目星をつけてもらい、数点を候補とした。

2-4 フライヤー及びポスターデザイン

フライヤー及びポスターのデザインは、3年生の菊地祥真が担当した。デザインにはニカという7歳の少女が描いた絵、『ウクライナの心』（図3）を使い、約1週間をかけて完成した（図4、5）。

2-5 準備

絵画を50点展示するにあたって、絵画を額縁に装丁し、それぞれにキャプションを作成する必要があった。準備にはおおよそ3日間かかり、このすべての工程において、学生が主体的に参加し作業を行った。以下にその主な作業内容を示す。

①額縁の購入

50点の絵画は様々なサイズで描かれており、決まった規格の紙に描かれたものはほとんどなかった。そのため1点ずつサイズを測り、おおよそのサイズで分類してから購入する額縁を選定した。

②マット台紙の作成

マット台紙とは、絵画を額縁に装丁する際に額縁のガラス面と絵画の間に挟む台紙のことで、絵画とガラス面の密着を防ぎ保護する目的や、絵画と額縁の間に余白を作ることによって絵画の見栄えを良くする効果がある（図6）。購入した額縁に、マット台紙が付属していたが、絵のサイズが様々であったため、そのまま使用することができず、厚手の画用紙をそれぞれの絵のサイズにカッターで切り抜いてマット台紙を50枚作成した（図7）。



図3 『ウクライナの心』

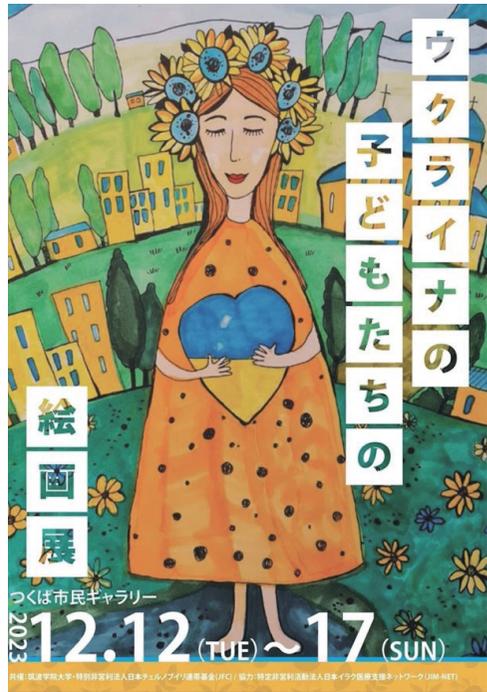


図4 完成したデザインの表面

ウクライナの子どもの心 絵画展

特別評議員法人日本フェリス学院 連携基金（JFC）では、ウクライナ西部のウジホロド、ポーランドのクワフ、ブルガリアのブルナデで暮らすウクライナ避難民の支援を続けています。支援のお礼として子どもたちが事務所に絵画を描きました。今回、日本国際学園大学（筑波学院大学）ではこの子どもたちの絵画をお借りし、つくば市民ギャラリーで絵画展を行います。会期中にはつくば在住のウクライナ学生同士の対談や、JFC理事長 神谷さだ子さんと特定評議員法人 日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）海外事業担当の齊藤亮平さんの対談イベントを行います。

子どもたちの絵を通して、不確定な時代の平和活動や人道支援についてと考えるきっかけになれば幸いです。




トークイベント

日本で暮らすウクライナ人学生の現在

12月17日(日) 10時～

日本の大学に在学するウクライナ人学生同士の対談を行います。祖国を離れて日本で暮らす彼らの思いや、ウクライナ戦争の現在について、お話ししていただきます。



トロブチン ニシタ
JFCの事務所で約10年勤務。ロシアの侵襲が始まり、キエフに避難した。2022年7月に日本に到着。現在は筑波学院大学に留学中、母と姉とともに茨城県つくば市に在住。

ウクライナイラク/子どもたち JCF×JIM-NET 対談

12月17日(日) 13時～

長年、平和活動や人道支援に従事してきたJFC理事長神谷さだ子さんと、JIM-NETでイラクのガンの子どもたちの医療支援を現場で行っている齊藤亮平さんが、ウクライナ、イラクの子どもたちについて対談します。



つくば市民ギャラリー
〒305-8565 茨城県つくば市大谷 1-1-1



神谷 さだ子（JFC理事長）
日本フェリス学院の理事長兼校長として、現在ウクライナ支援に携わり、2014年にキエフを訪問。当時のウクライナのユーロ・マイダン革命の状況を報道に報道で実際に目撃している。橋本一成議員「アーク」の制作にも「アークセイ」(2022)に制作者として参加。



齊藤 亮平（JIM-NET海外事業担当）
国立音楽大学卒業。青年海外協力隊（音楽隊員としてシリアへ派遣）、バシリア子舞踊団の小学校の音楽教育普及活動に従事。音楽隊員としてのシリアでの音楽隊員としての活動を行う。現在はJIM-NETの海外事業担当としてイラクのガンの子どもたちの医療支援ネットワークの構築として現地に、支援や被災者支援の活動に携わる。

※本展覧会開催期間中は、JFCの事務所（つくば市民ギャラリー）に、JFCの職員が常駐して、JFCの活動に関するお問い合わせや、JFCの活動に関するお問い合わせは、JFCのウェブサイト（http://www.jfc.or.jp/）をご覧ください。

図5 完成したデザインの裏面



図6 台紙を用いた展示



図7 台紙制作する学生

③キャプションの作成

美術展におけるキャプションとは、名刺サイズほどの小さなカードに作品のタイトル、作者の名前、素材といった文字情報を表示するもので、大抵は作品の下側に設置される(図8)。キャプションは、展覧会によって金属、プラスチック、紙といった様々な素材で作成されるが、今回はのりつきのスチレンパネルを使用した。Adobe Illustrator で、JFC から貸し出しただしてもらった一覧を確認しながら絵画の情報を入力、レイアウトし、プリントアウトしたものをスチレンパネルに貼ってカットして作成した(図9)。

2-6 搬入及び展示

2023年12月11日に絵画の搬入及び展示作業を行った(図10)。壁に展示する際はレーザー水準器を使用して水平垂直を出し、絵画

同士の間隔を壁の横幅に合わせて計算し、床からの距離を揃えて均等に並べた。絵画を壁に吊り固定する為に、径1mmの透明テグスと長さ3cm、径1.5mmの白く塗装されている釘を使用した。釘はテグスを引っ掛けて絵画を吊る他に、額縁の下部左右端2点の壁に打ち込んで落下防止の支えとした。約8時間をかけて絵画の展示及びキャプションの設置を行った(図11)。その他にも展示されている絵画の寄付つきポストカードと今回のプロジェクトに協力してもらったJFCの姉妹団体、日本イラク医療ネットワーク(以下JIM-NET)の寄付つき商品を募金活動のために受付に並べた(図12)。また、通行人にも興味を持ってもらえるようにギャラリーのガラス窓面には展覧会ポスターをアレンジした横断幕を展示し(図13)、ギャラリー入り口にはポスターパネルをイーゼルに立てた(図14)。



図8 絵画とキャプション



図9 キャプションをカットする学生



図10 展示作業を行う学生たち



図11 展示風景



図12 JCFとJIM-NETの寄付付き商品



図13 ギャラリーの窓面の横断幕



図14 ギャラリー入り口のポスターパネル



図15 ワークショップの様子

3. 絵画分析ワークショップ

2023年12月15日、5名の学生と絵画分析ワークショップを実施した(図15)。絵画分析には対話型鑑賞という方法を用いた。これは1980年代にニューヨーク近代美術館 MoMA で開発された鑑賞教育プログラムに、愛知県美術館学芸員の鈴木有紀氏がアレンジを加え、日本での普及を進めている学習法で、これからの教育において求められる、主体的に学ぶ力を育むための力を養うことができるように構築されている。鈴木氏の著書『教えない授業』によれば、この学習法は以下の4つの基本プロセスからなっている。

1 みる

対話型の鑑賞では、まずじっくり見る時間を確保します。なんとなくみるのではなく、意識を持って隅々まで観察することが大事です。(以下略)

2 考える

見たものについて考えることが次のステップとなります。直感や疑問を大切にしながらも、作品のどの部分を見てそう思ったのか、「根拠」を探すことを対話型鑑賞では重視します。(以下略)

3 話す

自分の考えたこと、心に湧き上がったさまざまな感情や疑問を、的確な言葉にしてグループの人に伝えます。みるという「体験」は、それを振り返る(言語化する)というプロセスを通して、一歩進んだ「経験」となります。(以下略)

4 聞く

最後のステップは他の人の意見に耳を傾けることです。(中略)他の人の発言に真摯に耳を傾けることそこから新たな視点を心得、改めて作品を「みる」と、それまで見えていなかったものが見えてくることがあります。

以上の四つを繰り返し、考えや視点をみんなで共有しながら鑑賞を深めていくのです。

また鈴木氏は著書の中で「子ども自身が鑑賞中見て考えて話して聞いたことをふりかえることでさらに学びを進めることができます。」と述べ重要性を説いている。これらのプロセスをもとにワークシートを作成した。

ワークショップ実施の際は、ファシリテーターとして教員が進行した。鈴木氏によれば、学修効果を高めるための4つの大切な質問があるという。

1 「作品の中で見つけたこと、気づいたこと、考えたこと、疑問でも何でもいいので話していきましょう」

作品を見ていきなり感想を述べるのは大人にもなかなか難しく感じられるものですがこの問いによって発言のハードルがグッと引き下げられます対話の扉を開くための問いと言えるでしょう。(以下略)

2 「どこからそう思う?」

授業やワークショップの中で子供が意見を述べた時ただ聞くだけでは話が広がったり繋がったりせずそのまま終わってしまいがちです。(中略)例えば作品を見て「綺麗だな」「汚いね」「面白い」「わーすごい」「なんか変だね」といった感想が沸き起こったとき、「どこからそう思う?」と問いかけます。感想や考えの根拠を聴く問いであり、論理的思考を促す問です。(以下略)

3 「他に見つけたこと、考えたことはないかな?」

この問いは鑑賞の視点がある特定の事柄に集中してしまいがちな時や対話がひと段落した時に、ほかの子どもの異なる視点を聞くことでさらに対話を深めたり広げたりするために使う問いです。(以下略)

4 「そこからどう思う?」

少し発展的な問いとして、「そこからどう思う?」というものもあります。参加者の発言に対して、さらに考えを広げること・深めることを促す問いかけです。(中略)

これらの質問を意識的に行いながら、発表者や他の鑑賞者の意見を引き出すことに努めた。

ワークショップでは、まず学生にそれぞれ任意で自分の気になる絵を選んでもらい、その一枚の絵を5分間じっくりと観察してもらった(図16)。観察が終わった後、その絵について、先ず選んだ学生に意見を述べてもらった。次に初見の



図16 じっくりと絵を観察する学生

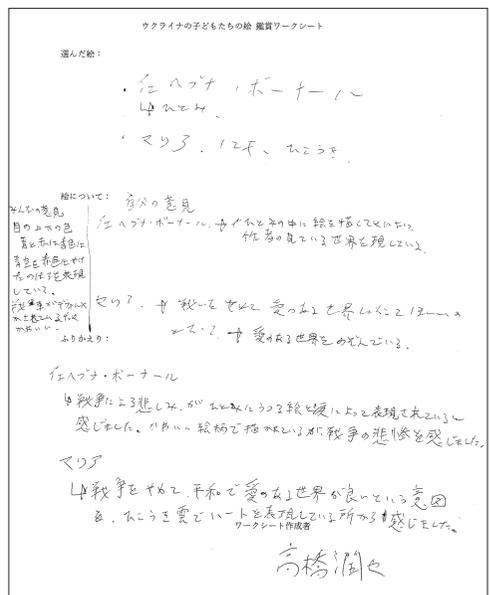


図17 実際に使用したワークシート

学生たちの意見を聞き、意見を交換しながら選んだ絵に何が書かれているのかを考察していった。ワークシートは自分が選んだ絵以外の絵についても全て記入してもらった(図17)。

4. ギャラリートーク

ギャラリートークは、12月17日に以下の日程/内容で行い、学生が参加した。

① 10:00～11:00 日本に暮らすウクライナ人学生の対談

本学1年生のウクライナ人避難留学生のトロプチン・ニキタさんと筑波大学のウクライナ人留学生が、自国の土地、文化、言葉についてスライドを使って紹介した。また、ウクライナの状況について地図を使って解説し、観客の質疑応答に応えた(図18)。



図18 ウクライナ人学生によるトーク



図19 JCFとJIM-NETの対談

② 13:00～14:00 JCFとJIM-NETの対談

長年平和活動や人道支援に従事してきたJCF理事長神谷さだ子さんと、イラクのがんの子供たちの医療支援を行うJIM-NET海外事業担当の斉藤亮平さんがウクライナ、イラクの子どもたちの現状について対談した(図19)。

5. 広報

本プロジェクトの広報活動は、事前の情報発信とイベント中の広報、という2つの段階で行われた。まず、事前の情報発信では、プレスリリースが行われ、各種メディアや関連団体に対して情報が発信された。さらに、大学の公式ウェブサイト、SNSを通じて告知を行なった。これらの広報活動により、全16社の新聞やオンラインニュース等に記事が掲載された(図20)。また、市民ギャラリーへの来場を促すために、学生がつくば駅前の店舗や公共施設などにフライヤーの配布をお願いするなど、直接的な広報活動も実施し来場者を募った。



図20 茨城新聞2023年12月18日掲載

6. 結果

ウクライナの子どもの絵画展の来場者(ギャラリートークを含む)は、6日間の開催で170名であった。また、期間中に寄付付き商品販売する募金活動では約3万円を集めた。

プロジェクトに参加した学生7名にGoogle formでアンケートを行なった結果、以下の回答を得た(表2)。

7. 考察

アンケート結果を見ると、個人差はあるものの、今回のアクティブラーニングプロジェクトが学生にとって平和や世界情勢についてより理解や関心を深めるきっかけとなったことがわかった。また、今回の目的とは関係ないが、展覧会を開催し作業工程を一通り行なったことにより、後に行われた卒業制作展の準備に際して、プロジェクトに参加した3、4年生の学生を中心に滞りなく行われ、意外なところで本アクティブラーニングの効果を発見することができた。しかし、展覧会とトークイベント、ワークショップの開催に力が傾き、広報活動に時間を割けず、一般来場者の集客が思うように行かなかった。この結果に関しては、事前に広報課と連携することや、教員、学生で広報チームを作るなどして対策が可能であると考える。今後の課題としていきたい。

また、絵画分析のワークショップについてアン

ケート結果を見ると、他の人の意見を聞くことによって考えが広がり、作品に対してより理解を深める効果が認められた。このことから、このワークショップは、他者の意見を受け入れる寛容さ、そして客観性を養うことに繋がるのではないかと考える。このような力は、デザイン系の授業で作品制作を行う際に非常に重要な力であり、このような試みを普通の授業の中でも取り入れていきたい。

謝辞

本研究は、特別非営利法人日本チェルノブイリ連帯基金（JFC）及び、特別非営利活動法人日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）、日本国際学園大学共同研究の協力、支援を得て実施された。ここに感謝の意を表する。

参考文献

[1] 鈴木有紀著 2019年「教えない授業」英治出版